

モノ
『本は物である 装丁という仕事』

桂川 潤著

(2400円+税/新曜社)

本——それが、いかに手仕事の産物であるかを、あらためて痛感させられる一冊だ。

とりわけ、本づくりの過程を追った第2章は、多くの読者にとって「未知との遭遇」となる。普段は目にする事のない裏方の工程が、事細かに記される。

本文印刷、表紙の箔押し、製函や製本……。そのどこにも登場するのが、人間の手、手、手だ。

第4章の作家との交友録が照らし出すのも、協働作業の成果としての本の姿

だ。「電子書籍元年」のいま、物づくりの視点で本のあり方を問いかける。(隆)

本は物である
装丁という仕事



桂川潤